

臨床における共感の認識の検討

The change of the recognition of the empathy in clinical psychology.

○中妻拓也¹・サトウタツヤ²・望月 昭²

○Takuya Nakatsuma¹., Tatsuya Sato²., Akira Mochizuki².

¹立命館グローバル・イノベーション研究機構・²立命館大学

¹Ritsumeikan global innovation research organization., ²Ritsumeikan University.

Key words:共感, 理論, 臨床

目的

現在、心理臨床や対人援助においては「共感(共感性)」という概念は、カウンセリングや支援を行う際の基本的姿勢や援助職を目指す人物が獲得すべき性質として着目されてきた。心理学辞典(1999)では「他者の情動状態を知覚するに伴って生起する代理的な反応」と定義される共感であるが、他の辞典では異なる定義がなされており、概念として一定の定義を得られていない。このように多義性がみられる共感の概念を実践の場に応用し、活用するためには、共感がどのような概念と認識されていたかを整理し、知識として獲得しておくことが重要と考えられる。よって本発表では、臨床心理や対人援助に関連した共感の概念、特に臨床での概念定着の中心人物といえと Kohut,H と Rogers,C の理論を概観し、相違点と共通点から臨床における共感の在り様を検討する。

方法

Kohut,H と Rogers,C の理論を概観し、理論の共通点、相違点から対人援助における共感の在り方を検討する。

結果・考察

まず、Kohut(1959)だが、自己心理学論者として共感を重視した療法を展開する。共感の役割については、「心理学現象は内省と相手の内省に対する共感によってだけ観察できる(Kohut,1959)」としており、共感を治療に関して情報収集の道具(あり方)とする、一貫した姿勢が特徴であり、あくまでも精神分析における科学的な観察技法として共感を研究し続けた姿勢が見られる。

対して Rogers(1957)は「治療的人格変化の必要十分条件」において第5条件で共感を「クライアントの私的世界をそれが自分自身の世界であるかのように感じとり、しかも『あたかも……のごとく』(“as if” quality) という性質をけっして失わない」と定義し、共感的理解としてカウンセラーの基本姿勢に挙げた。のちに Rogers(1975)は共感の「最近の定義」を、「『状態 state』というよりむしろ『プロセス process』として記述したほうが、自ら満足できる(小林,2004)」としている。

次に Kohut と Rogers の共感の理論における相違点と共通点であるが、まず、相違点としては共感の役割についての認識であろう。Kohut が精神分析における観察道具としての共感を主張する姿勢に対し、Rogers は共感を精神分析の観察の道具と使用する姿勢への抵抗を示している。この姿勢の対立が両者の理論の大きな違いであろう。しかしその反面、共通点も多い。

もっとも本質的な共通点は Rogers の「あたかもへの

ごとく」が表わすようにカウンセラー、クライアント双方が自身の感覚を持ち寄りながら、ある程度のポイントで感覚を共有するというプロセスという意味での「共感」と、Kohut の「共感とは本質において中立的で客観的なものであり主観的なものではない」という言及に見られる共感の適度な距離感の想定である。これは、対象者に没入せずにカウンセリングを行うカウンセラーの姿勢の一端を表していると考えられる。

次の共通点としては、Rogers(1957)が言及した、「クライアントの怒り、恐れ、あるいは混乱を、あたかも自分自身のものであるかのように感じ、しかもその中に自分自身の怒り、恐れ、混乱をまきこませ」ている状態、もしくは Kohut(1981)が、「治療者が自分の主観性を通して相手の主観性を捉えたつもりになっている」と表現した「状態」についての言及である。これは、伝統的精神分析が主張していた、「逆転移の許す範囲でのみ患者の主観的世界を認識することができる(富樫,2013)」といった治療観や、臨床心理学で主張されることのある「自分の体験に照らし合わせて相手を理解する(富樫,2013)」といった状態に該当すると考えられる。この状態は、カウンセリングが終焉する段階に差し掛かった時に、うまくカウンセラーとクライアントが別離する妨げになる危険性をはらむと考えられる。

本研究では臨床心理学に関わった共感についての検討を行ったが、距離感を保ち、適切にフェードアウトするという部分では対人援助職の望まれる姿勢につながると考えられる。よって今後は対人援助という側面からも共感の機能を検討したい。

本研究をまとめるにあたって、立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構の研究プロジェクト「対人援助学の展開としての学習学の創造」の助成を得た。

参考文献

- Kohut, H. (1959). *Introspection, empathy and psychoanalysis: An examination of the relationship between modes of observation and theory*. Journal of American Psychoanalytic Association, 7,459-483.
- Rogers,C.R.(1957).*The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change*. Journal of consulting psychology, 21(2), 95-103.
- Rogers,C.(1975). *Empathic: An unappreciated way of being*. The counseling psychologist, 5(2), 2-9.
- 富樫公一(2013).コフートの共感と関係性 富樫公一(編).ポスト・コフートの精神分析システム理論. 誠信書房